

平年収量が増減する都道府県の生産事情

(詳 細 版)

平成21年 3 月 11 日

農林水産省統計部

(北 海 道)

1 品種構成の動向

「きらら397」や、「ほしのゆめ」が減少し、良食味で収量水準の高い「ななつぼし」及び良食味ではあるがやや収量水準の低い「おぼろづき」が増加傾向にある。

2 栽培技術等の動向

生育遅延対策(苗の成苗化と適期移植等)や適正な施肥量の遵守等の指導により、高品質・良食味米の安定生産が推進されている。

3 温暖化の影響

夏が暑いことは収量にはプラスに働くと考えられるが、毎年7月に低温の時期があり、冷害の危険性は常にある(20年産も道東で冷害が発生)。

このため、北海道の稲作にとって、温暖化の影響は明確ではない。

<最近の作柄(平成14年産以降)>

年次	全もみ数	登熟	被害	作況指数			一等米比率	
				8/15	9/15	最終		
H14	×	×	×	××	平年並み	94	91	76
15	○	×	×	×	著しい不良	81	73	65
16	×	○	×	×	やや良	99	98	85
17	◎	—	◎	×	やや良	109	109	83
18	○	○	◎	×	平年並み	105	105	88
19	○	×	—	×	平年並み	99	98	91
20	◎	—	◎	×	やや良	106	106	89 (1月末)

注: ◎: 良(多い) ○: やや良(やや多い) —: 平年並み ×: やや不良(やや少ない) ××: 不良(少ない) ただし、被害は◎: 少ない ○: やや少ない —: 平年並み ×: やや多い ××: 多い

4 収量水準の動向

成苗植えなどにより、初期生育を促進し高収量で安定的に生産する栽培技術が普及しており、収量水準の高い品種が増加傾向にあること等から、道全体の収量水準は上昇傾向にある。

<品種別、地域別作付面積の動向による単収水準の推移>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
ななつぼし	557	14.3	15.7	20.4	25.2	32.1	37.0
きらら397	564	40.9	41.6	39.9	37.2	33.4	30.6
ほしのゆめ	540	32.4	30.5	27.6	23.9	17.8	12.5
おぼろづき	529	0.0	0.0	1.5	2.5	4.5	6.4
はくちょうもち	488	5.5	5.5	5.2	5.2	4.6	4.0
単収水準の動向(前年との差)					0.1	0.6	0.5

地域(地帯)名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
石狩	520	7.1	7.0	6.9	6.9	6.9	6.9
南空知	522	21.6	21.2	20.9	20.9	20.9	21.1
北空知	562	24.0	24.3	24.6	24.8	25.0	25.2
上川	546	26.1	26.4	26.2	26.5	26.4	26.4
留萌 :	503	4.0	4.0	4.1	4.0	4.0	4.0
単収水準の動向(前年との差)					0.5	0.1	0.3

※ 10a当たり収量の水準は最近7か年のうち、豊凶2か年を除く5か年平均
平成21年産見込は市町村別の需要量に関する情報及び種子の予約数量から推計

<低温発生時期と20年産の状況>

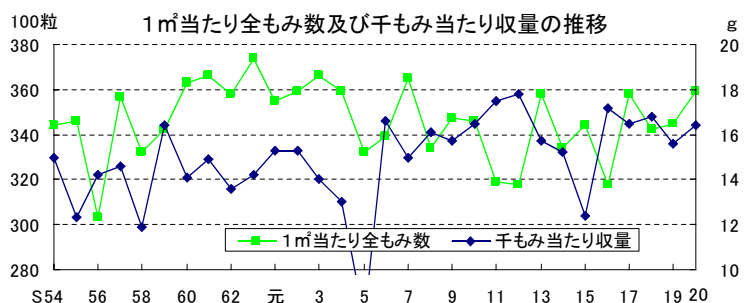
	平均気温の平年差(℃)						作況 指数	出穂 最盛期
	7月			8月				
	第1旬	2	3	1	2	3		
H15	-1.7	-2.6	-4.1	-1.4	-1.9	-0.7	73	8/6
16	-0.5	0.4	2.2	3.3	-1.6	-1.8	98	7/29
17	-1.5	0.9	-0.6	1.6	2.1	1.1	109	7/31
18	0.5	1.2	-1.3	2.0	2.7	2.3	105	8/5
19	0.1	-1.9	-1.1	0.6	2.5	1.4	98	7/30
20	3.1	0.6	-0.8	0.0	-0.7	-1.6	106	8/2

※ 1 出穂最盛期の2週間前〜1週間前が冷害危険期といわれる。
2 気象データは札幌市。

上川 作況指数 107		気 温 : 平年差 (°C) 日照時間 : 平年比 (%) (観測地点: 旭川)								
		7月			8月			9月		
		上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
最高気温	4.0	-1.1	-0.4	-0.1	-0.5	-2.3	4.0	3.7	-1.2	
最低気温	2.7	1.1	-1.7	-1.7	-1.9	-1.3	2.3	-0.7	-1.2	
日照時間	96	54	113	135	95	80	120	164	90	
		出穂(7/30)						刈取(9/30)		

網走 作況指数 70		(観測地点: 網走)								
		7月			8月			9月		
		上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
最高気温	7.0	-2.4	-1.1	0.9	-0.4	-3.2	2.9	3.2	0.8	
最低気温	3.9	1.0	-1.8	0.8	-0.9	-1.5	2.5	1.6	-1.1	
日照時間	144	9	112	132	83	35	142	134	129	
		出穂(8/8)						刈取(10/6)		

<もみ数及び登熟の推移>



(埼 玉 県)

1 品種構成の動向

消費者・実需者ニーズの高い「コシヒカリ」、「彩のかがやき」、「キヌヒカリ」への集約が進められる一方で、収量水準の比較的高い「朝の光」等が減少傾向にある。

2 栽培技術等の動向

品質や食味の向上を図るため、品種特性や地域の土壌条件等に応じた適切な栽培管理や適期収穫の徹底等の指導がなされている。

3 温暖化の影響

ここ数年、田植期は横ばいで推移しており、出穂期及び登熟期間の最低気温(夜温)も横ばいとなっている。

また、一等米比率は平成15年以降80%を上回り、登熟にとってマイナスの影響は見られない。

<最近の作柄(平成14年産以降)>

年次	全もみ数	登熟	被害	作況指数		一等米比率
				9/15	最終	
H14	—	—	×	99	98	64
15	×	×	×	95	94	94
16	○	◎	○	106	107	85
17	×	○	—	99	100	82
18	×	—	×	95	94	92
19	×	×	×	98	96	85
20	×	○	—	100	99	89 (1月末)

注：◎：良(多い) ○：やや良(やや多い) —：平年並み
×：やや不良(やや少ない) ××：不良(少ない) ただし、被害は◎：少ない ○：やや少ない —：平年並み ×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

収量水準の高い「朝の光」等の作付面積割合が減少していることに加え、品質・食味を重視する栽培が普及しているためか、近年の全もみ数は減少傾向にある。

このため、収量水準は低下している。

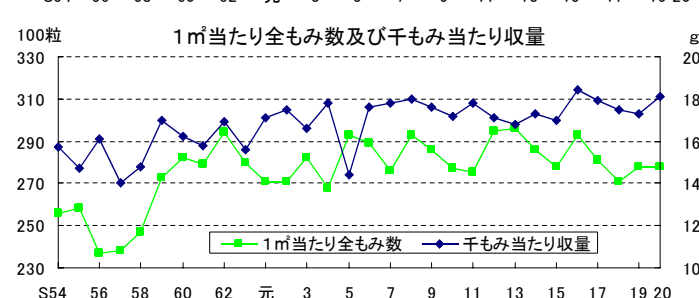
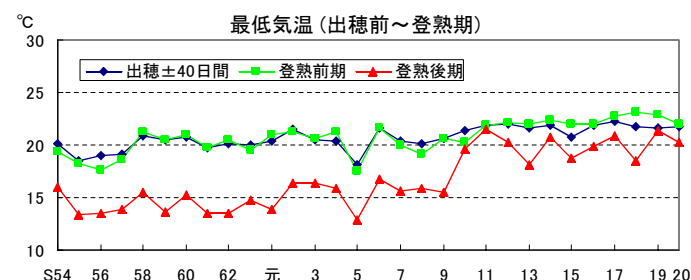
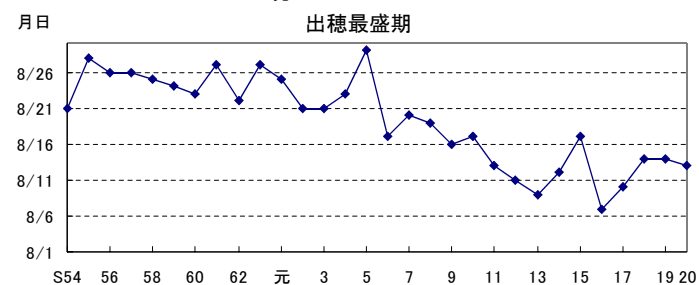
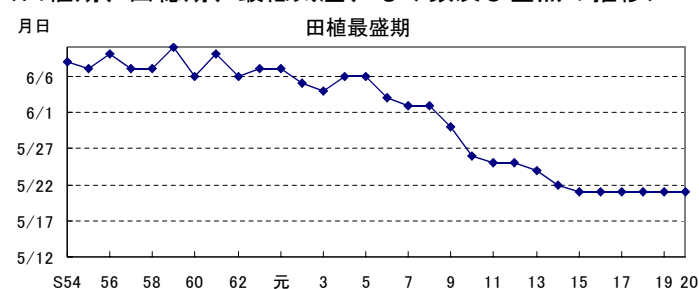
<品種別、地域別作付面積の動向による単収水準の推移>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
コシヒカリ	475	34.6	35.4	35.2	35.9	36.9	36.9
彩のかがやき	521	4.4	8.0	15.6	19.0	25.0	26.0
キヌヒカリ	451	19.2	19.4	19.0	18.7	18.8	18.8
朝の光	551	12.4	10.1	9.2	8.5	7.2	4.3
あかね空	505	8.3	7.1	3.8	3.5	1.8	1.2
日本晴	536	3.5	2.3	0.6	—	—	—
アキニシキ	533	4.1	3.9	2.8	1.4	0.6	0.6
ゆめみのり	546	4.2	1.6	—	—	—	—
あさひの夢	535	4.2	2.0	4.1	3.4	2.5	2.5
単収水準の動向(前年との差)					-0.6	-0.2	-1.7

地域(地帯)名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
東部	503	66.1	66.0	66.0	66.1	66.1	66.1
西部	459	33.9	34.0	34.0	33.9	33.9	33.9
単収水準の動向(前年との差)					0.1	0.0	0.0

※ 10a当たり収量水準は最近7か年のうち、豊凶2か年を除く5か年平均
平成21年産見込は市町村別の需要量に関する情報及び種子の予約数量から推計

<田植期、出穂期、最低気温、もみ数及び登熟の推移>



(千葉県)

1 品種構成の動向

主力品種の「コシヒカリ」等が減少し、消費者ニーズが高く、収量水準の高い「ふさこがね」が増加傾向にある。

2 栽培技術等の動向

気象変動や生育状況に即した栽培管理の指導（植え付け早限の順守や適正な施肥・水管理の徹底等）により、早場米産地としての特徴を活かし、おいしさや安全・安心などの高付加価値化を推進している。

3 温暖化の影響

近年は、田植期が横ばいで推移しており、出穂期及び登熟期間の最低気温（夜温）も横ばいとなっている。

また、一等米比率は平成15年以降おおむね90%を上回っていることから、登熟によってマイナスの影響は見られない。

<最近の作柄（平成14年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	作況指数			一等米比率
				8/15	9/15	最終	
H14	○	—	—	やや良	101	101	73
15	—	×	×	やや不良	96	96	91
16	○	○	○	やや良	107	107	91
17	—	○	—	平年並み	102	102	87
18	×	×	×	やや不良	96	96	91
19	×	○	×	やや不良	98	98	93
20	○	○	○	やや良	105	105	93 (1月末)

注：○：良（多い） ○：やや良（やや多い） —：平年並み ×：やや不良（やや少ない） ××：不良（少ない） ただし、被害は◎：少ない ○：やや少ない —：平年並み ×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

「ふさこがね」の作付割合の増加に加え、適正な施肥管理等の結果からか、近年登熟（千もみ当たり収量）は上昇傾向にある。このため、収量水準は上昇している。

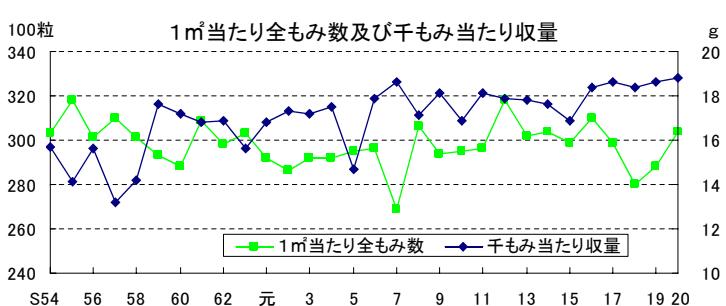
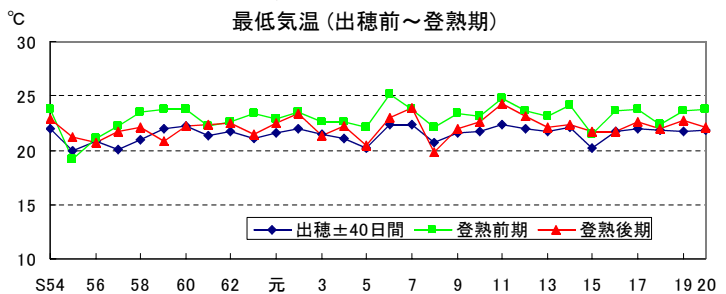
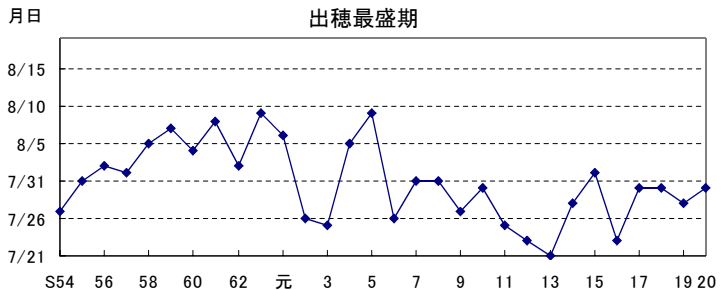
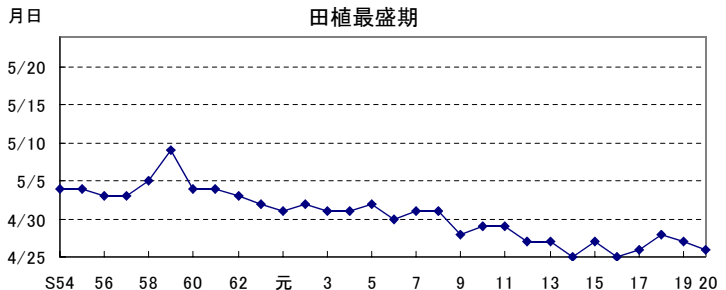
<品種別、地域別作付面積の動向による単収水準の推移>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
コシヒカリ	532	70.0	70.9	71.0	67.2	66.5	66.4
ふさおとめ	565	12.0	13.3	14.2	15.2	12.9	11.9
あきたこまち	556	10.0	9.0	7.5	6.2	5.7	5.2
ふさこがね	587	—	0.9	2.4	5.5	10.9	12.5
単収水準の動向(前年との差)					1.9	2.0	0.5

地域(地帯)名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
京葉	518	27.1	27.1	27.1	26.9	27.1	27.1
九十九里	547	51.4	51.7	51.9	52.0	51.8	51.8
南房総	506	21.5	21.2	21.0	21.1	21.1	21.1
単収水準の動向(前年との差)					0.0	0.0	0.0

※ 10a当たり収量の水準は最近7か年のうち、豊凶2か年を除く5か年平均
平成21年産見込は市町村別の需要量に関する情報及び種子の予約数量から推計

<田植期、出穂期、最低気温、もみ数及び登熟の推移>



(神 奈 川 県)

1 品種構成の動向

主力品種の「キヌヒカリ」を中心とし、近年、「祭り晴」が減少する一方、良食味で収量水準の高い「さとじまん」がやや増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

品質の向上に向け、地域に応じた適切な肥培管理や適期収穫の指導がなされている。

3 温暖化の影響

近年は、田植期が横ばいで推移しており、出穂期及び登熟期間の最低気温(夜温)も横ばいとなっている。

また、近年の登熟(千もみ当たり収量)もおおむね安定しており、登熟にとってマイナスの影響は見られない。

<最近の作柄(平成14年産以降)>

年次	全もみ数	登熟	被害	作況指数		一等米比率
				9/15	最終	
H14	×	○	—	99	100	9
15	×	—	×	96	96	15
16	○	○	○	104	106	47
17	—	○	○	103	104	22
18	×	×	×	96	97	24
19	—	—	○	101	101	10
20	○	—	○	102	104	23 (1月末)

注：○：良(多い) ○：やや良(やや多い) —：平年並み
×：やや不良(やや少ない) ××：不良(少ない) だし、被害は○：少ない ○：やや少ない —：平年並み ×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

収量水準の高い「さとじまん」の作付面積割合が増加していることから、収量水準は上昇している。

<品種別、地域別作付面積の動向による単収水準の推移>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
キヌヒカリ	497	71.2	72.1	70.1	66.3	67.2	67.0
さとじまん	554	—	1.7	13.4	13.4	16.8	17.0
コシヒカリ	454	7.4	7.4	6.5	6.5	7.1	7.0
祭り晴	494	11.8	9.5	5.8	4.4	0.0	—
単収水準の動向(前年との差)					0.3	2.0	0.1

地域(地帯)名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
横浜	466	35.1	35.2	35.0	35.0	35.0	35.0
平塚	486	64.9	64.8	65.0	65.0	65.0	65.0
単収水準の動向(前年との差)					0.0	0.0	0.0

※ 10a当たり収量の水準は最近7か年のうち、豊凶2か年を除く5か年平均
平成21年産見込は市町村別の需要量に関する情報及び種子の予約数量から推計

<田植期、出穂期、最低気温、もみ数及び登熟の推移>

